



南  
太平記圖會

七

慶

圓心

友

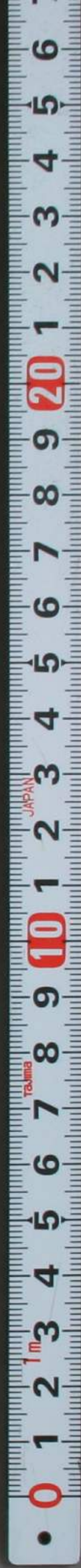
正成

親護  
王良

齊

義貞

尊氏





明 13  
編 1989  
卷 8

南北太平記圖會卷之七

初篇

目錄

百萬大軍圍千劍破城  
 正成擲石木折東兵  
 正成一破名越時在  
 正成二破名越時在  
 數百藁人形欺數萬人  
 就敵計行味方計  
 名越伯姪變死遊興  
 正成墨外燒雲梯  
 正成謀金澤貞冬





及覆計貞冬損兵  
 船田智擒近郷野士  
 賜綸旨義貞歸軍  
 公經勇崩千劍破砦  
 正氏正遠夜襲敵陣  
 伊東赤松開中國  
 土居得能伏四國  
 主上潜遁德岐州  
 佛舍利御船救危難  
 長年募義軍船上  
 諸國官軍聚船上

南北太平記圖會卷之七

初篇

百萬大軍圍千劍破城 正成擲石木碎東兵

爰千劍破城へ向ふ寄手八前ふ八十萬騎と聞へる吉野赤攻の  
 両城へ向ふ諸手の軍勢差加まつて百萬余騎野々満山漫々城の四  
 方二三里の間を取圍尺寸の地も軍勢をさぐる所も無く陸續として押並  
 有様ハ宛も稻麻竹葦子等しく旗旌風ふ翻つて吹靡氣色ハ秋の  
 野末の尾花よりも繁く劍戟の日映けて耀く凄まじく曉の霜を千草  
 の上ふ置がごとし大軍の責近附處山川草木是が爲に揺動鯨波の  
 震ハ響く中ハ坤軸須臾子摧ぬべし然とも此勢ひも不恐して後  
 千人不足ぬ小勢にて何を待とも多く誰を懸ともなく城中ハ怖へて防  
 戦入正成が心の程こそ不敵を去ハ此城ハ石河郡の内中て金剛山



小續三麓より城まで八僅二町ありて四方の廻り一里ふくむと云ふも谷深く  
崖峙つて矢石の便を失ひ地勢東西へ長く南北は狭し子卯午の三方  
小高峯聳て近しとつども獨立して是は小續より四壁の外は峻岨にして  
鳥も翔り難し四堅絶比の軍地して小を以て大に對し寡を以て衆に  
敵するの要害あり西の方を大手とし城のめりり小芝を築事高四尺  
又四尺間毎小長さ二間の柱を立其根地小入事三尺土中して二取つ  
の貫を通し芝の上小五尺の塀を掛られ如何に押とも崩す又乗越事  
も難し其上小矢切り柱の間毎小矢狭間をつけ内小三尺の走櫓を所  
く小搔り是ハ大石大木を投出す設あり高櫓を雜へ塀の内二間半  
を除て樹木を植事垣の如し是敵ハ容易小乗入事あり味方ハ防  
小便あり故あり松柏の餘木ハ若葉の時摘取て食用とし技ハ薪とし  
大木ハ家建の用とし又三四尺の廻り成を五六尺小切密石小交へて

際小積置敵小投付る備あり鐵三萬斤を用意し城中して鍛冶小  
命して矢の根を打し其外硫磺焰硝松明の類炭塩味噌醬油干魚干  
菜燈油より第一米麥粟大豆小至るまで數年の用意其數計へり故是  
皆重代の財寶を沽却して貯る所あり水ハ山の半面小密法靈應の  
加持水五箇所在て何なる旱中も盡り事なく一晝夜小滴り事十斛  
に少し不足あり是を笠城の人歩小分小余り有といふも笠城ハ水  
の手第一をれむとて大なる水船を數多造らむ數箇所の役所の軒小  
継桶を懸て雨降ハ雷を少しも余さず舟へ受入舟底小赤土を沈て水  
症の損ぢぬ工夫をなす兵糧野菜の洗ひ汁ハ不捨して士卒の洗足の  
湯小用ひ尚是をも不捨水船小湛へて火矢を消すも用水小守元を  
城の名を千劍破と稱すれども千劍萬撃もこれを破事を得る堅  
城あり加之守將正成古今小秀し良將をれむ策を城中帷幕



の内子隠し。勝事を墨外數萬の敵に決し進み破り退いて守りて。機に臨變に應じり程に容易此城を責破る様ハありり。然ども寄手ハ目子餘り大勢と云。僅廻り一里に足ぬ小城多れば何程の事有べしと見侮て。初一兩日ハ向ひ陣をも不取我先と城の木戸口まで被連て登る。されども城中あり少くも不騒静に及びて敵を思ふ國へ偽引寄。高櫓より大木大石を投懸く。掬版を微塵に打碎滯る處を差詰り射立る程に四方の攻より轉落く落重て死する者あり。矢先懸く半死半生の輩あり。暫の城責み手負死人六千余人及びびる。長崎四郎左衛門尉軍奉行あり有れば。手負死人の實檢をみる。執筆十二人晝夜三日の間筆をも不置注し。因之自今後ハ大将の許多くハ根合戦し。ん輩ハ却て可處嚴料りを被觸る。諸手の軍勢暫く引退て先已く陣くを構る。爰に赤及討手の大将とりりし。金澤右馬助文

佛陸奥守に向て被申る。前日赤及を攻落し以ひつる事。全く我々の高名に非ず。城中の水道を留み以て依り。敵程なく降参仕て以ひ。今此城を伺ひ以。是程繞る山の巔に用水有べくも覺ひ。亦あげ水を外山より懸べ。便も以てぬ。城中に水卓散有氣に見へハ。察し以東の山の麓を流し溪水を夜に汲くと覺ひ。哀れ宗徒の人々一兩輩に被仰付て。此水を汲さぬ様所計ひ以へとつり。くれむ。大佛陸奥守長寄四良左衛門兩大将此義可然覺いと。聽て名越前守時育を大将とし。三千余騎にて彼溪水の邊に陣を張せ。城より下るべし。徑く逆木を引て今や来ると待くれども。楠ハ元来山上五箇所の秘水を汲す。天水の雷を用ひ。故強し。此溪水を汲んともせむ。くれれば。水防の名越の兵ども。夜毎く。小機を詰り守り。始の程をわれ。後ハ次第く。心懈り氣緩て。





正成溪へ下つて名越時在が陣を夜討の圖



扱ハ城中外ハ水ヲ引テ。此溪水ハ汲ズリタリトシテ。少シモ用心の体多ク  
タリ。正成これを見テ。虎ノ一を一夜討テ。敵の肝を拉グベシ  
アリトシテ。密ニ其手配ヲ被及ル

正成一破名越時在

正成二破名越時在

去ハ正成ハ多くの忍者を遣シ。名越ガ陣を窺セ。其中所の異ト同ト正  
成ガ意ハ合ト不合トを分別シ。扱名越ガ陣を見積ル。敵ハ惣本陣ト  
間を隔ル事。近キハ八丁遠キハ十六七丁城ヨリ名越ガ陣ハ凡五丁余ト  
見テ。三百余人を三手ニ分相印相詞を定め。先陣ハ湯浅六郎定春  
百余人名越ガ水番ニ付置ル。輩を撃ベト下知。二陣ハ北止玄蕃  
宗持百余人名越ガ陣の周章騒グ所を懸テ切崩ス。と申渡シ  
三陣ハ楠三郎正澄百余人城の麓の小塚ニ備ヘを堅メ先陣二陣を進  
其脅力を助ベト命ト。扱時刻を謀ル。子忍者進出テ名越時有ハ

何も夜半ニ酒宴をタリ。又ハ碁双六ニ遊レハ申ケル。去ハ卯の  
一天可然トモ定ル。又其宵ニ忍の士十六人を名越ガ陣ニ入置時  
有驚テ陣ヨリ出ル所を組止ベト下知。又城ニ残り五百余人ハ物具  
を固メ面々持口を守リ。若敵寄来ラズ手痛ク防グベト申渡シ。  
其上夜討の諸勢ヲ令を出シ。申サレタリ。吾夜半ニ陣を襲ヘ敵の  
様子を見積ル。三度の引太鼓を打ベ。初の引太鼓を。湯浅北辻  
の両将連ニ引取申サレ。二番の引太鼓を撃バ正澄早く引ベ。  
假令眼前ニ敵の大將を討ベ。圖ニ當ルトモ。鼓を聞ハ万事を捨テ  
連ニ引攀ベ。其故如何トモ。敵ハ百萬の大軍を。大将一人討レ  
テ。虎ノ痛トモ。味方ハ千騎ニ。小勢多レモ。一人  
を失テ。城の弱ト成。故也。若曳口鈍シ。敵ニ付ラレ。城  
戸を開テ。各々を捨ベ。是又各々を助ケ。城戸を不用敵







笑して打見アリ三十人を前後に立、閑くと城へ引上るハ由を鋪き、見へり。其日ハ正成思ふ子細在り、城中物音も多し。諸將諸卒、今曉の手柄を称し、功の軽重に依り、錢貨木綿の類を褒賞す。時、北江玄蕃進出て申さるハ、何とぞ今朝手ハ一、名越が旗幕を敵に見、嘲り笑ふて怒を起さる。正成打黙て、能く申されり。正成を存せざらふ。然れども、今曉寄手騒乱の跡あり。名越が旗幕を、せりとも、轉倒の終ま、目を止る者、つゝ、又万一城中、三本唐笠の旗の立ちを見、速名越殿を城中へ攻入りし。一人溜出、一、一犬空を傳へて、万犬空を吼る。如く、數萬の寄手雲霞のごとく、競ひかき、其勢の決然として、城甚だ危ふるべし。明日、手の子細を聞、侍らば、此計ハ明日、つゝ、其夜岸の上、大木を横と、弩を張せ、置渡の日、三本、

紋の旗幕を城の大手に、士卒を櫓の上へ、大音して呼り、様ハ一昨夜の合戦、名越殿の御陣に、残し置ま、旗幕の品、無余義城中へ、取入置は、他人の為、無用の者、是へ、御入、御清取、は、同音、と笑、寄手の怒軍、是を見て、穴、哀れ、名越の家、の恥辱也、と、口、小、沙汰、程、名越一家、の輩、此事を、安、守、思、ひ、くれ、此上、ハ、當手、の者、一人も、不、残、城、の、木、戸、を、枕、あ、り、て、討、死、す、と、憤、り、其、勢、五、千、余、騎、身、命、を、不、顧、乘、越、く、逆、木、一、重、引、破、り、城、の、切、岸、の、下、を、押、詰、り、岸、高、く、切、立、る、如、く、あ、れ、ハ、心、ハ、矢、長、ふ、ま、れ、ど、も、更、に、登、り、様、も、あ、り、り、れ、バ、徒、に、城、を、睨、で、立、る、處、に、思、ひ、も、い、ぬ、城、の、上、り、通、り、拵、置、る、大、木、十、株、計、堀、の、上、り、切、て、落、し、れ、バ、名、越、が、軍、勢、四、五、百、人、將、幕、倒、し、壓、付、ら、れ、起、も、揚、ら、ず、死、す、り、る、残、る、兵、是、を、逃、れ、ん、と、止、途、路、に、成、て、騒、ぐ、處、を、櫓、の、





捕  
 人  
 形  
 を  
 造  
 夜  
 中  
 城  
 の  
 麓  
 子  
 立  
 り  
 図





正成  
蒙人偶  
以て  
守手  
偽引  
欺く  
因



上より指下し條突如く小射立くれ。初五千余人の軍勢残す。あふ  
討被成散くの幹よ引退。其日の軍ハ止み。滅小志の程ハ猛  
わぐれとも。楠の智謀小碎くれ。初の義勢も似ず。氣憶れ。若于  
の兵を失ひくれ。寄手の惣軍口く。去連ハ亦名誠殿。耻の上の不  
覺哉と嘲らぬ者もなかり。大将長寄四郎左衛門尉泰光。此有  
様を見て。此城中く。小力攻。あすあ。人を損ず。計。其功を  
得難。此上ハ唯取圍。食責。可為と下知。暫く軍を被止。ら  
百入葉形。欺百萬。人。就敵計。施味方計。  
斯て千劍破の寄手ハ。皆徒然。堪兼。花下の連敵師を呼下。て。  
萬句の連敵を。興行。其初日の發句ハ。長寄九郎左衛門  
尉師宗。有る。山楼

と。座中の。立。悦び。藤治郎右衛門尉行親  
其服の句。小

嵐や花の

とぞ付。滅小。句共。小。河の縁巧。句。体。尤も。優。あれとも。  
御方を。櫻。見立。敵を。嵐。喻へ。服。あれ。禁忌也。  
る。表事。多。後。思ひ。知れ。其外。尉方。の。優。小。或。其。基  
將。基。双。六。日。を。送。又。復。敗。の。敵。合。百。服。系。を。既。び。て。夜。を。明  
くれ。を。城。中。の。兵。ハ。中。く。是。小。被。惱。る。心。地。て。遣。方。を。思。れ  
ハ。正。成。り。て。去。を。寄。手。を。方。便。て。居。眠。を。覺。さ。味。方。の。辭。氣。を。散  
す。べ。し。と。て。藁。芥。を。以。て。人。長。の。人。形。を。七。八。十。作。是。甲。由。を。著。  
兵。杖。を。持。て。夜。中。に。城。の。麓。小。立。置。前。小。置。楯。を。突。双。其。後。小。す  
ら。兵。五。百。人。を。交。へ。夜。の。の。と。明。霞。の。際。り。同。時。小。興



咄と作四方の寄手是を聞てすや城中より打て出さるは定て兵糧  
あや盡つらん是こそ運の窮る處にて死狂ひの者どもを討取んと我  
先ふとぞ馳合ふる。城の兵ハ難て正成の下知られた。矢軍暫くす  
様して敵の大勢を麓へ迫付入形計を木隠し残置て五百余人の  
者どもハ次第くふらり引よ城の上へ引上る。寄手ハ残り人形を實の  
兵と心得て我討止んと相集り正成ハ所存の如く敵を僅偶寄て  
大石を四五十計一度は繩を切發せば矢庭ハ寄手四五百人被討殺  
谷へ轉び岩ハ丸蹴半死半生の者五百余人及びぐれも數万の寄  
手大ふ驚き又楠の古狸ハ欺れと云傳ハ惣崩れ退きたる。  
軍果て是を伺ふ哀れ大副者哉と覺へく數万の敵を見まら  
み一足も引ざりつる兵ハ皆蒙りて作れる人偶也。是を討んと敢  
寄て石ヲおめて死々も愚者也。又是を大副の勇士と見て危

進得ざりたるも臆病の至り也。兎や角も不覺をとりて渚方の物  
笑ひとぞ成みり。是より後ハ弥責寄んと云者一人もなき唯徒に城  
を向上我陣を守むかりとて為業一もなきり。爰ハ何者ハ案  
しりらん。古致を泳翻して大將の陣の前よぞ立ちりり。  
餘所ハのを見や止らん島城の高間の山の峯の楠  
斯ぞ嘲哂せり事。口惜き次第をれども更ハ方便の施す様  
もなきり。忍心の者を以て城中の射を窺んと思われれども塙  
高りて乗越事も不叶。城戸の固異ハ嚴ちりれむ。是も難く  
入事を得ざり。爰ハ足利治部大輔高氏同舎弟九兵衛高直  
義寄手の中ハ加らるおろろ密ハ大佛右馬權介高直と  
して何卒城中返忠の者を誘引し内外より責る程なきハ城  
さん事。掌中よりくぐりと様くと由縁を求め楠ハ良後早瀬吉太郎



と云者子内縁の者を語らひ。早瀬の方へ遣し。若寄手を引入る。恩賞  
として二千貫の所領を賜らんとて。大佛高直の花押をすく。御教書  
を送り。又當座の引出ありとて。金五百兩を典へる。正成ハ斯事も  
うんうと思ひくれむ。兼て渚勢ハ法を出し。若敵より手引して城を  
破ら。何程の賞を當行んと云送らんハ。早く我子知す。我又  
所領もも金銀もも敵より送り。一倍を益て典ふべき也と堅く定  
め置れ。同早瀬速子来つて。正成まかくと告り。くれバ。正成則ち  
所領金子共倍。すしの印鑑を早瀬に遣し。敵の計。就て態と内應  
の返書を送ら。くる。寄手ハ大喜びて。夜討の時刻を  
究め。先人質を渡す。べき。しを早瀬の方へ申哉。り。くれむ。早瀬心  
驚き。急ぎ。正成を見へて。如何計らひ。いと伺ひ。くれむ。正成則ち  
敵への返答。ハ人質の事。承知仕。いと。親類一族ハ城中。み

一人も。これ。なく。皆南都の方。み。忍羅在。ハ。如何。とも。仕難。く。ハ。因て。一  
紙の誓旨を可致。して。以。同。譬。仕。損。し。いと。所領。安堵。無。相違。の。目。貴  
邊。より。も。御。誓。紙。可。給。して。いと。云。送。ら。せ。くれむ。寄手の衆將。評。義  
の上。人質の事。ハ。不及。是非。互の。神文。可。然。と。て。寄手と早瀬の双方  
より。誓書の。為。取替。を。あ。り。くる。然。れ。バ。早瀬の案内。と。今宵。こ  
そ。城。を。乗。取。べ。と。て。足利の家士。細川九郎義實。子。五百。余。騎。を。典  
へ。く。先陣。とし。人。ハ。を。含。み。馬。ハ。嚙。を。閉。て。静。く。と。城。に。向。き。を。惣  
軍。ハ。跡。み。ひ。う。へ。く。時。刻。今。や。と。待。り。くる。正成ハ早瀬。に。下。知。り。城  
外。第一の。嶮。ハ。三。谷。へ。敵。を。偽。引。寄。思。ひ。かけ。ち。さ。城。の。嶮。より。一。同。子  
松明。を。顯。ハ。一。関。を。嚙。と。揚。り。し。り。ハ。寄。手。の。兵。大。に。驚。き。す。と。や  
又。例。の。計。み。落。さ。れ。り。速。子。引。退。と。り。程。を。し。れ。嶮。ハ。路。を。我  
先。と。押。合。込。合。ひ。り。やく。所。を。上。り。大。石。を。投。かけ。く。松明。の。う。け



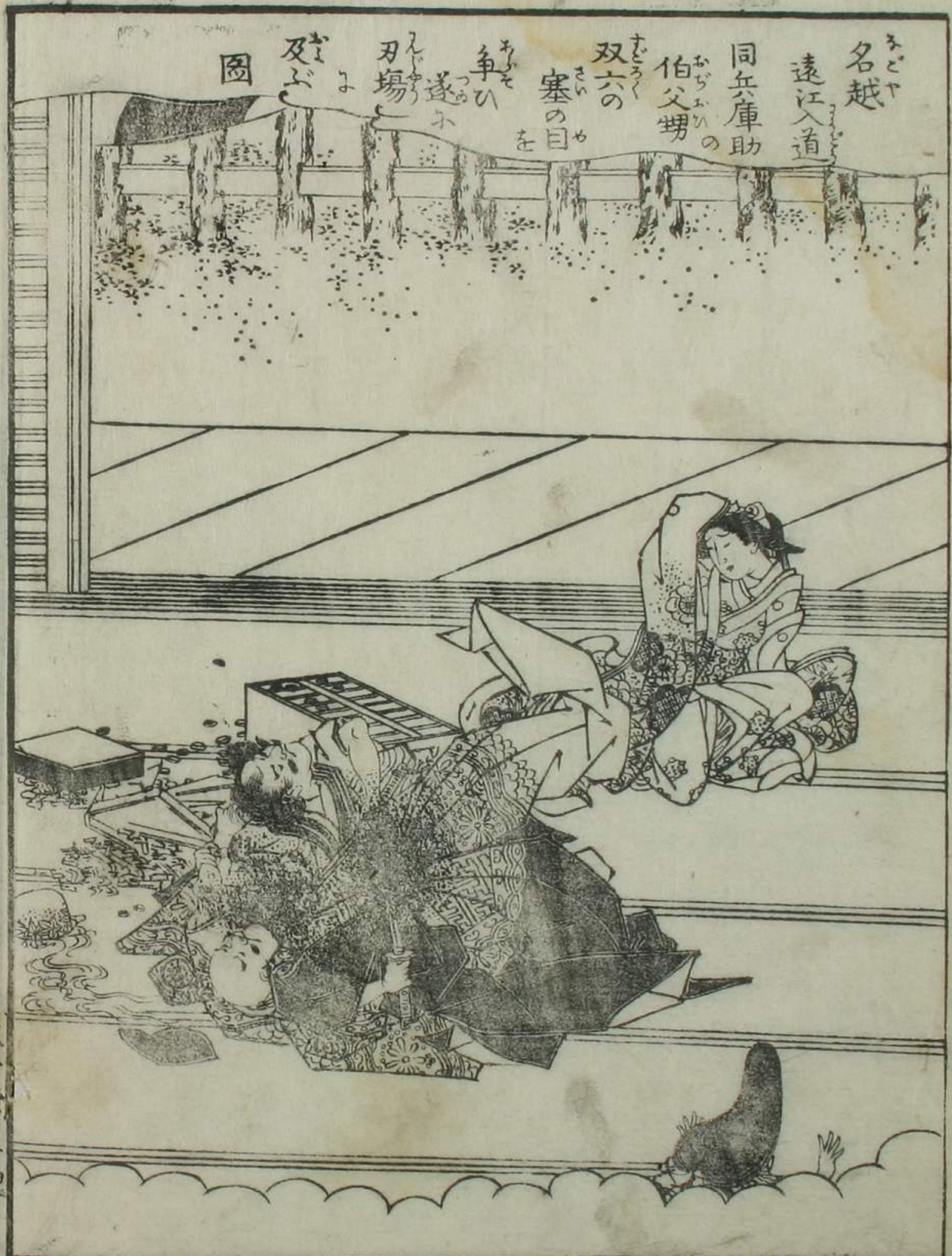
より散く小射立々れむ。哀れむべし細川九郎を始として足利の良  
従六十三人即時小討れ其外手負死人夥しく々れむ。寄手の惣  
軍舌を巻く引退せし。弥以て城へ近付者ハ一人もあつりたり

名越伯姪変死遊興 正成墨外燒敵雲梯

鎌倉の大軍千劍破の城を取圍。手を盡し品を替て責々れども寄  
り度毎小味方を損ずる而已あり々れむ。さうも副ある坂東勢も膽  
を失して攻あざ。已く陣くを堅め弥軍をせきり々れむ。諸國の  
軍勢徒然不堪兼。大将の陣くハ江口神寄の里より。思ひくに  
遊女白拍子共を呼寄。様くの遊小慰れ々々。名越遠江入道公馬  
同兵庫助時家の伯甥共一方の大將として責口近く陣を取。後所  
を双へて被居々々。或時遊君の前して双六を打れ々々。塞の目を  
論じて駢々言葉の違々。伯父甥二人突違てそ死々々。因之兩人

の良後何の趣意も不辨差違く死する程。片時が同小死々々。もの  
二百余人不及々々。城中より是を見て十善の君小敵對奉り天罰  
に因て自滅する者どもの有様を見々々と笑ひ々々。滅小是直事小ら  
らず。天魔波旬の所行歟と覺へて。浅猿かりし珍事也。斯ら慶小三月  
四日鎌倉より飛脚到来し軍戦を止めて後小日を送事不可然し  
被下知々れむ。宗徒の大將打取て評定せ々々。小金沢右馬介進々出  
御方の向ひ陣より敵城の堀を打越。切岸の上まで長々。梯を打渡。是  
を渡つて攻入らんハ如何成楠ちりとも可施計不可有と申され々々。諸  
大将皆これに同じ。急々京都より番匠五百余人為之小召下し五六八  
九寸の材木を集めて廣々一丈五尺長二十丈餘の梯を。夜小日を継て  
ぞ造らせ々々。正成此由を聞てつぎ々々。我魚て是を防ぐ用意。つうとて  
少くも不騒去程小掙既。造立せし。大繩を二三十筋付て車を以







卷立城の切岸の上へ倒しかけらる有様ハ魯般が雲の梯も角ヤと覺へて巧あり。躡て早雄の兵五六千人橋の上へ走りかけり。我先ふと前よりこれを行もや此城唯今ハ責落されぬべく見へる處ハ正成時分を見すし魚て支度の投松明ハ火を付て梯の上へ數百本投かけく投下し。又乾々柴ハ焰焔を包きて投出くればハ忽ち梯ハ火移て焰焔をどむして燃立とらへ。又城より水弾を以て油を雨の如くハ弾かけられむ。谷風いと吹くも。炎すすく盛あり。梯を渡りける兵前へ進ずんとすれを猛火盛ハ身を焦す。吸らんとすれを後の大勢先ハ難義も不知して曳やくと押詰るを。進退馬ハ窮つて互ハ押合踏倒され岨へ飛下んとすれを谷深く巖聳へて膽を冷す計あれむ。如何ハせんと思身を採回ハ橋桁の中より燃折て數千の兵谷へ落込。岩ハひいられ。炎ハ焦されて死する有ま。ハ修羅呵責の業人刀山劔樹ハ貫れ阿鼻

燒熱の罪人猛火鑊湯ハ苦惱するもかくやと思ひ知れと。後陣の勢ハ是ハ驚色せり立て見へる處ハ正成城門を颯と開て退兵五百余騎を以て敵の後陣ハ突て懸。尤ハ通里右子當で前ハ渡り後ハ開きて人なき所を行が如くハ荒らじ。數万の寄手懸合さんとす者一人もなく。絶五百余騎の小勢ハ追崩され右往左往ハ散乱。後より逃来味方も敵の追ぞと心得て親を見捨。主を見殘し我先と退しハ見苦かり。次第あり。正成ハ味方小勢をハ長追して過ちけん事を恐れ引貝を吹せて早く兵をひき。舉ぐる。因之寄手ハ弥手懲して已前の如く我陣くを守り。後ハ月日を送りたり。

正成謀金沢貞冬

及覆計貞冬損兵

爰ハ正成ハ寄手の内金沢右馬介貞冬ハやもすれハ城を落さんと



種く手便を巡らすしを聞て何卒彼不覺をともせ恐怖の心を  
發させんと謀を案じ觀心寺に磬へら七郎正氏の方へ密に細作を以  
て謀の様を談しければ正氏則ち臼井小藤太木次平次の二人に計を  
云含め落人の躰ももて金沢貞冬が家の子岩城右近といふ者  
の方へ便て申させらる。我等ハ觀心寺に磬へら七郎正氏  
手の者こそい。千劍破の城中既兵糧乏しき由もいへ。落城遠る  
まじく覺ゆ千劍破落城も及ゆ。觀心寺の岩ととも長く保ふ  
か守徒ふ大死仕ひせん。今ハ御手も從ひ奉らしを憑ければ岩  
城右近も城を亡ぶ手便もやと思ひければ二人を召連金沢貞  
冬も見へらくの由を申ければ金沢大も喜び楠といふもかく長  
龜城もいつて兵糧の續くべしや。彼が時運既盡る。汝等何  
もして御方を城へ引入る手術ハあるやと尋ければ二人答て申

々ハ正成の老臣恩地左近。兼て大將を恨む心有り。此者を御語  
らひつて計成就仕べく。金沢色をひそめていへ。若恩地を御  
方もかくひ内外より城を責る程も。正成の心を懐かむや汝等い  
かして恩地を御方招くべきやと有りければ二人答へて申様城中  
の守嚴しければ容易入難くいへ。今大塔宮の令旨を似て一通の  
作文を賜ふ。速に入城して恩地と對面し。委細の事を申入し  
と有りければ金沢則ち謀計の品を調へ二人も渡し被申る二人を  
を清取て城に至る。正成も見へて此由を申ければ正成急ぎ恩地を  
呼もて密談し。又兩人も謀を授けて再び寄手の陣へ取りける。二人  
岩城もついで又金沢も見へて申る。我等正成も遇て似せ令旨  
を。密に恩地と對面して仰の趣を申ていへ。左近答て申ハ  
今日本の内子助の勢もさ孤城も籠りいへ。終る落城可仕事









正成  
寄手の  
雲梯を  
焼落  
寸圖





宗徒の一族八人。剛強の士三十餘人を小沢白井の二人に差す。密に城中へ遣し、諸犬將も此趣を告相圖の時刻を待とう。小沢白井ハ城の木戸へ至り、恩地が手の著るりと断り、則ち鑑札を以て事故ちく四十余人を伴ひて城中へ通す。正成が居住の書手なる槽の下へ四十余人を忍びこめて、恩地が相圖をせせせり。去程み春の夜早く子の上刺も過ると覺へれば、恩地尤近満一密に用意を調へ、手勢を引連彼槽の下へ至す。金沢が宗徒の兵四十余人に對し、早く正成が役所へ切へしと下知しければ、金沢が兵恩地が兵に案内をせ、既し槽へ切入らんとせし所を、恩地満一ハ勝りせと。夜稀令を掛りければ、恩地が兵思も守。金沢が兵を中へ取込て、無二無三に切て、金沢が兵大に驚き、如何と狼狽騒ぐを、一人も残らず討てり。其後柴を廣庭に積て、火の手を見せ鐘

を鳴し、鯨波を揚さじり、寄手の惣軍、すハヤ相圖を成るぞやと、し程をうれ、雲霞の如く湧立て、城隙近く取かる。正成ハ高槽より見済し、例の大木を投おし、用意の石弓を釣堀放ち、放させれば、何ハ以てするべき、數万の寄手、將基倒し、打崩され、手負死人數を知らず。暫時の間、小谷一つを死人として埋りければ、又こそ楠は欺くれ、寄手の惣軍肝を冷し、這くの体も皆陣へ引取らるが、余も夥し、兵を揃じらるり、皆口くみ、さる金沢殿の不覺より、我くや、斯り憂目を見り、事と罵れば、金沢大に面目を失ひ、ちての言訳、人質の平九郎を罪小行ふべしと思はるるに、是も其夜楠の細作八人、金沢が陣へ忍び入て、平九郎を後出せし。平九郎と共に番の兵六人を切伏行方、出す去り。是より金沢開口して、城を責り、軍議ハ一言も申さぬ事、成りたる



船田智擒近郷野士

賜綸旨義貞歸軍

此時大塔宮ハ吉野御没落の後高野山に於て御座る程を  
葛城の山邊へ移らるの芳野十津河守多内郡の野士を驅催し  
のひくれバ相集事七千人宮の命を含て此峯彼の谷に立隠れ  
て千劍破の寄手の通路を差塞るるも。諸國の軍勢忽ち兵糧  
不盡て人馬共疲れ苦々轉漕ふ。兼て百騎二百騎づ。左右不  
事とせ皆ゆけくと引及びを案内知る野伏の輩所くのへり  
くふ待受て討留る間。日々夜々討つ者數を不知希有  
命計を助る者ハ馬物具を捨衣裳を剥取られて赤裸となり。  
漸く破る叢を引纏て。鬮計を隠し或ハ草を腰に巻て耻が  
やしとる落人。毎日引もさす。十方へ逃散有様ハ前代未聞の  
耻辱也。日本國の武家を傳へる重代の物具太刀刀ハ皆此時

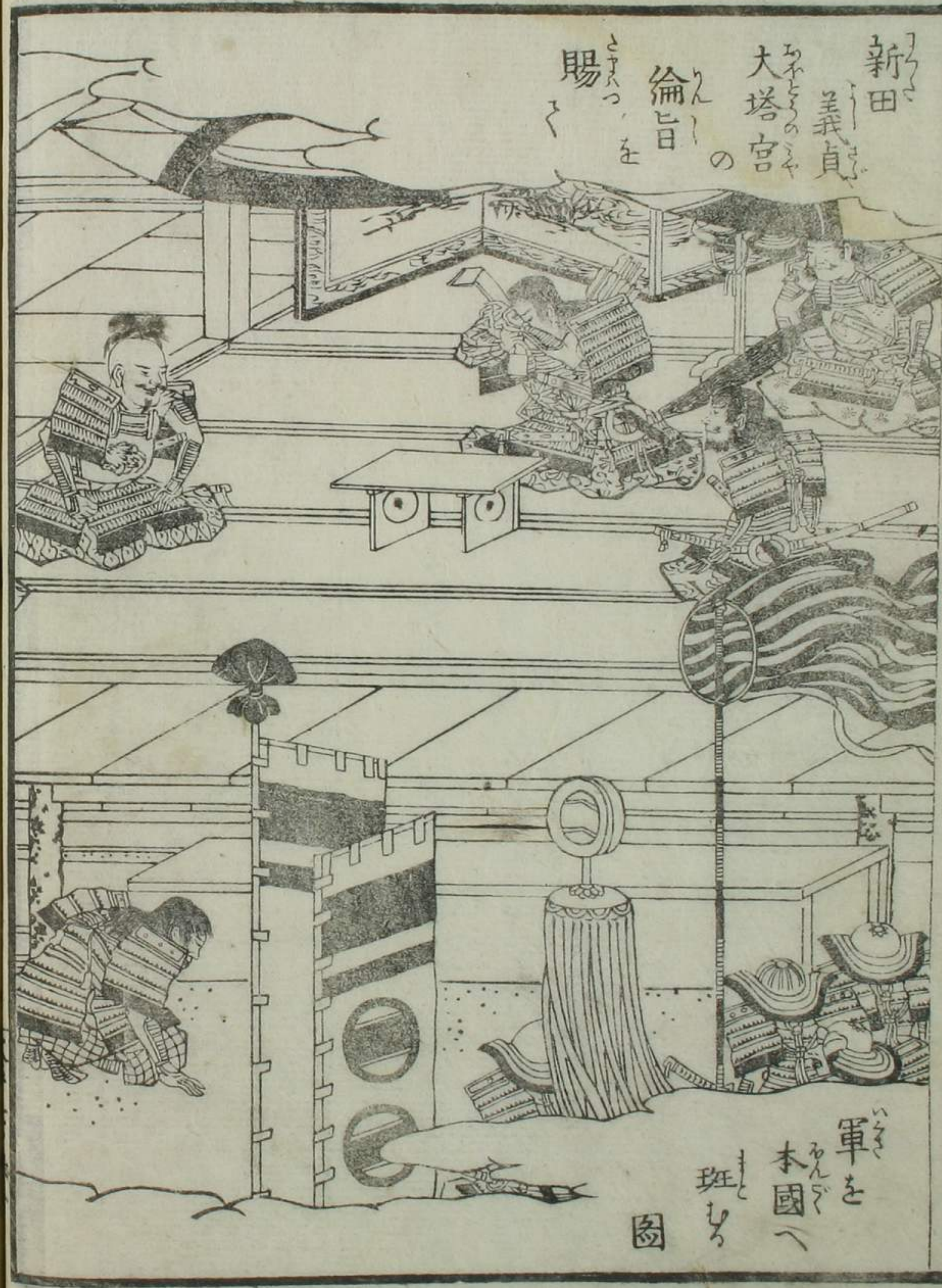
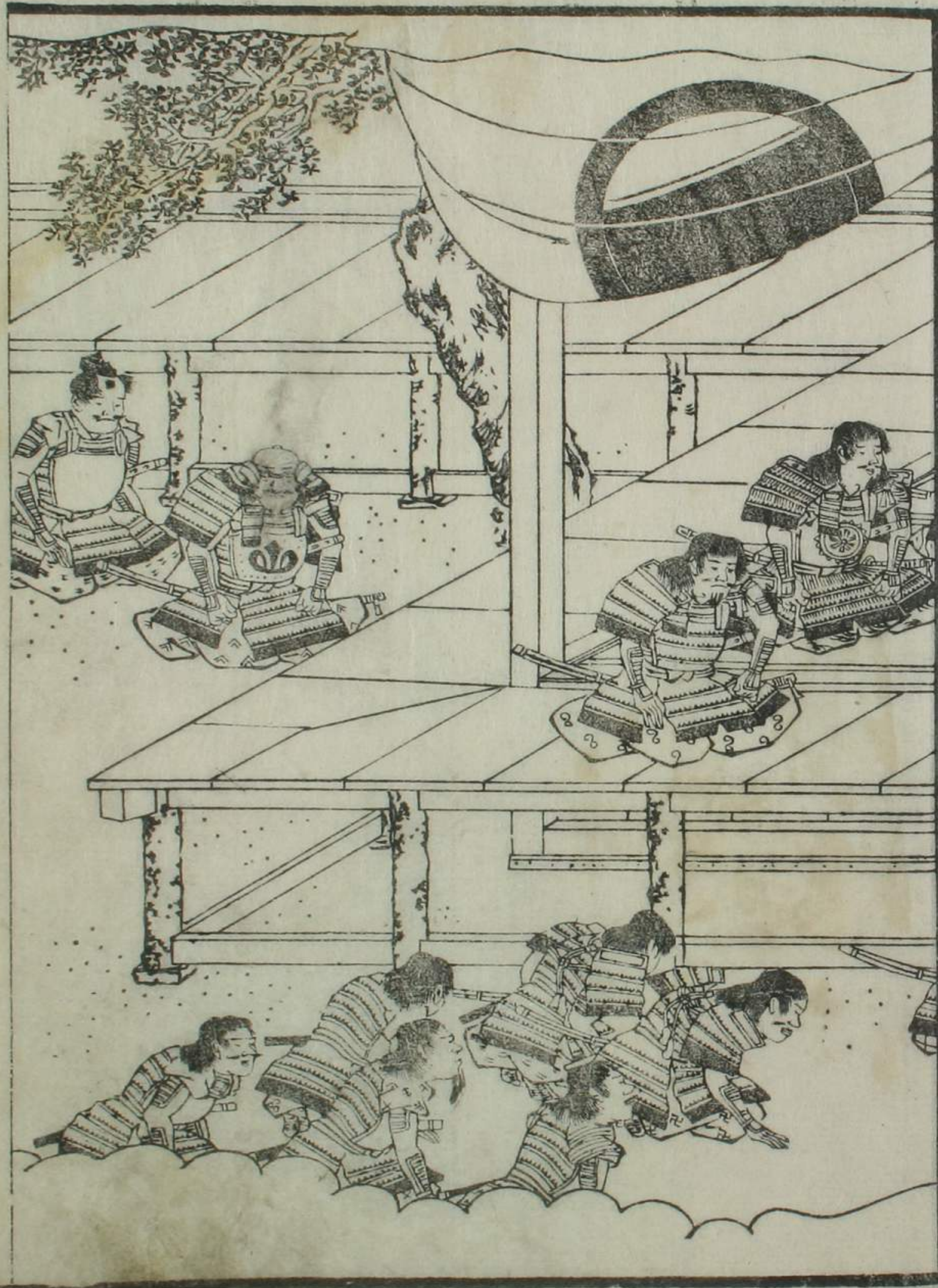
ふ至りて失りたり。既始ハ百万騎八十萬騎と聞へる。千劍破の  
寄手も今ハ總ハ十万騎餘り成り。馬に寄手の中ハ上野國  
の住人新田小太郎義貞と一人の英雄なり。智ハ韓信周亞夫  
並び勇ハ樊噲王陵に比すべし。其先祖を尋み清和天皇七代の後胤  
八幡太郎義家十代の末孫也。義家源氏の家嫡として。鎮守府將軍  
兼陸奥守に任じられ。武威を天下に震ひ。男子八人有り。嫡男九衛門  
尉義宗。次男對馬守義親。三男河内守義忠。四男式部大輔義國。五  
男九兵衛尉義時。六男陸奥六郎義隆。七男僧增珍。八男八郎信實  
あり。然し嫡男義宗ハ早世せられぬ。次男義親ハ違勅の罪に  
出雲の國へ配流せられ。遂に逆心の聞へ在て誅せられ申され。三男義  
忠ハ叔父新羅三郎義光と不快の事。在て害せらる。四男義國ハ後  
加賀介に任じられ。久安六年參陣の時。狼籍の事。在て所領下野



國足利小下向せり。此義國ハ大副の荒武者とておつるが仁和三  
三月出家入道つりしを人皆荒加賀入道殿とぞ申る。義國ハ四男  
嫡男太郎義重上野の新田を領じ大炊介に任ぜり。是則ち新  
田家の元祖也。次男義康ハ下野の足利を領して藏人に任ぜり。是足  
利仁木細川吉良今川畠山等の元祖也。三男ハ左衛門督國康四男ハ條院  
判官代季邦なり。又新田義重ハ八男つり。長男ハ里見太郎義俊次男  
新田大炊介義兼三男伊豆守義範四男四郎義季五男五郎経義六  
男藏人義盛七男冠者義光八男小四郎義祐也。義俊長男なりと  
いへども里見の家を興し義兼次男なりといへども新田の家督を継で  
嫡流とる。小新田と号せり。其末孫太郎政義の三世太郎次郎朝氏  
と号す。義貞ハ則ち朝氏の嫡男也。然不足利ハ次男の家なり。義康  
の嫡子九馬頭義兼ハ右大将頼朝卿と相聳ふして北條遠江守時

政の女を婚て九馬頭義氏を没せり。義氏ハ武藏守泰時の  
聳と成て宮内少輔泰氏を没せり。泰氏ハ修理大夫時氏の聳と  
成て九馬頭頼氏を没せり。頼氏の孫濱岐守貞氏ハ赤橋相模守時  
氏の聳と成て高氏を没せり。如斯足利家ハ頼朝卿の時より此方數代  
北條宗徒の縁者なり。因て自然と其推勢強く新田家ハ嫡流なり  
といへども自不時遇してつとろく所領も減じ威も衰へて何となく世を恨  
みて暮し申されたるが今度義貞鎌倉の權臣に因て千劍破の寄  
手に加り搦手の方子在陣しておりたるが日比高時が暴悪を憎  
申されれば力を盡し術を施して城を責る心もなき後子月日を  
送り申されたるが或夜の徒然に執事船田入道義昌を近付て宣るハ  
古より源平両家朝庭に仕へて平家世を乱時ハ源家は是を鎮め  
源氏上を侵日ハ平氏は是を治む。義貞不肖なりといへども源家の





新田 義貞  
大塔宮  
倫旨  
賜

軍を  
本國へ  
班し  
圖



門楣として濳代弓箭の名を汚せり。而も今相模入道が行跡を見  
ふ滅亡近きあり。我本國も帰て義兵を擧。先朝の宸襟を休  
奉て。家を興さん事を想とりども。勅命を頭も戴されば人の及する  
事かじ。免りて主上の隠岐の遠所も御座て。遙の波濤を隔れば。  
是容易事ふらう。爰も大塔宮一品親王の令旨を申賜らん。不而と  
想ども。是も御行衛を知らば可詮は。此素懐如何して可達とら  
し。船田入道點頭て申々る。大塔宮ハ此邊の山林も忍び御座じ  
沙汰仕々ハ某方便を巡じ。速も令旨を申給るべし。いと心安  
領承し。次の日手の者三十人計を野士の質も出立せ。夜の間に葛城  
山の麓も忍び置我身ハ百人余りの士卒を引連千劍破の寄手の  
落行様もをめて。朝も霧隠れも追つ返ら半時余り。同  
士軍をちりちり。宮も一味も奉り。宇多内郡の野士ども。此体を見懸

す。味方の者ども。洛人を取込さじと戦ふる。あれ助し。云々  
ふ。此彼も馳来り。船田俄も同士軍を止實の野士を大勢  
の中へ追取込十一人。生捕る。則ち陣屋へ引及り。急ぎ其いしめ  
を解ゆして申々る。ハ今汝等を召捕事且て殺さんと思ふ。非ず某  
ハ新田小太郎義貞殿の御内。船田義昌といふ者あり。吾主人  
義貞宮の御味方とあり。本國上野も及て義兵を起さんと欲する  
と。今宮の令旨を申請奉らして。威を關東も震ふ事  
難し。汝等如何計へよ。野伏一同も平伏し。中も一人  
進出て申々る。ハ夫も最安御事。其も御暇を給る。速  
も令旨を申下し。参るべし。則ち十人を質として。船田が役所も  
残し置忍び。一人取り。今や遅しと待る。日に一日在。馳  
参り。頭て令旨を取。出で捧ぐ。義貞急ぎ頂戴有て。悉く



拜瀆ひんじやくのりくれば。是令旨これまじのりくで。則ち論旨ろんしの文章ぶんしやうもこそ書かれ。其詞そのことばも曰いふ。

被論言稱敷ひんげんげんをいふ化理くわに萬國者ばんこくを。明君德也めいきんとく。撥乱鎮四海者はつらんちんしやうかい武臣ぶしん節也せつ。頃年之際きんねん。高時法師たかとき一類いつるい。蔑如めいじよ。朝憲あそけん恣心ししん。振逆しんぎやく。威積いせき。惡之あく。至天しつてん。洙已しゆい。頭焉あたま。為休累年しゆらいねん之宸襟しんしん。將起まさり一舉いつしよ。義兵ぎへい。敵感てきかん。尤深よしん。抽賞しゆしやう。何浅なにあし。早運はやうん。鍾倉しゆくら。征罰しやうばつ。策可致さくかち。天下てんか。靜濫しやうらん。之功者のちゆうしやう。論旨ろんし如此このごとく。仍執達いんしやくたつ。如件このごとく。

元弘三年三月十一日

九少将

新田小太郎殿

とらりくれば。義貞ぎへい不斜喜ふさき。吉野よしのの方かたへ嚮むか。て三面さんめん押戴おしお。論旨ろんしの文章ぶんしやうも賜たま。り事こと。我家わがやの面目めんもく。何事なにこと。か之これ。此上このかみハ速すみ。小國こくに立帰たしかへ。て義兵ぎへいを起おこ。し。敵憲てきけんを休やす。じ奉たご。らん。呼よ。已高時いこうとき。累積らいせきの惡逆あくぎやく。今

み洙戮しゆりやくを加くわ。へ我年頃われねんの鬱憤うつぷんを散ま。ずしと罵のの。し。を。船田ふねのが即智すなは。を感賞かんしやう。し。十一人の野士のし。引引出物ひきだ。を典たて。へて家や。に收こ。り。次の日つぎのひより。虚病きよびやうを構かま。へ密ひそ。に陣ぢん。を曳ひ。き。ひ。本國ほんくにとして。を急いそ。ぐ。れ。多おほ。く。畢竟ひつきやう。義貞ぎへい。上野かみのに及およ。び。つ。て。幾程いくぢやう。を義軍ぎいんを起おこ。し。時日ときひを不ふ。移うつ。鍾倉しゆくら。に攻入せうに。高時たかときを亡な。して。朝敵あそてきの根ねを断た。つ。其株そのくわを倒た。す。故ゆゑ。に。諸方しよかたの枝葉えだ。自ら枯盡かじん。す。小こ。に至いた。る。去い。ば。元弘げんこうの兵へい。乱らん。四海しやうかい。平定へいぢやうの功いさ。に於お。て。ハ。正成せいせい。義貞ぎへい。を以も。て。第一だいいちと評ひやう。す。既すで。に。正成せいせい。日本にっぽん。大おほ。小國こくに々の兵へい。を繞めぐ。り。小城せうじやう。に引受ひきう。て。之これ。を惱な。す。故ゆゑ。に。今いま。を。北條きたじやうの威勢ゐせい。を恐おそ。れ。る。者もの。共とも。も。其軍立そのいんたての拙あや。さ。を見み。て。官軍くわんいん。に心こころ。を寄よ。り。所治しよぢ。城じやう。を。赤松あかまつ。伊東いとう。足利あしかが。土居とけ。得能とく。の輩たぐひ。舉あ。げ。て。む。ご。ふ。べ。く。就す。中な。正成せいせい。小勢せうせい。を以も。て。大軍たいいん。を喰く。ひ。止と。ま。り。つ。づ。れ。ば。鍾倉しゆくら。中な。以も。て。外ほか。の多勢たせい。して。義貞ぎへい。豈あ。か。輕かろ。く。功いさ。を成事せいじ。を得え。べ。ん。や。正成せいせい。篝城かすま。如件このごとく。あれば。又また。鍾倉しゆくら。に手て。を下くだ。す。事こと。不ふ。能た。り。然しか。る。時とき。ハ。義貞ぎへい。引ひ。き。ず。して。誰たれ。も。人望じんぼう。に當あ。つ。て。高時たかとき。を



亡し得ん尚後巻分鮮を可見

按小船田義昌に名捕さる野士の内。殿法印良忠が手不属する。意多持  
太郎次郎と云者有り。此者才覚在て力量人。勝れ其頃忍術ふおのりハ  
大和河内ふかられさる。其異名を稻妻と称せり。前に法印良忠禁卒を  
脱出も全く此意多持が助け出也。則宮の令旨を請じ来り。此者有り。如  
斯の美王何しとあちくと船田は生捕れん。これ偏小義貞素懐を達し。るべき  
前表をるべし

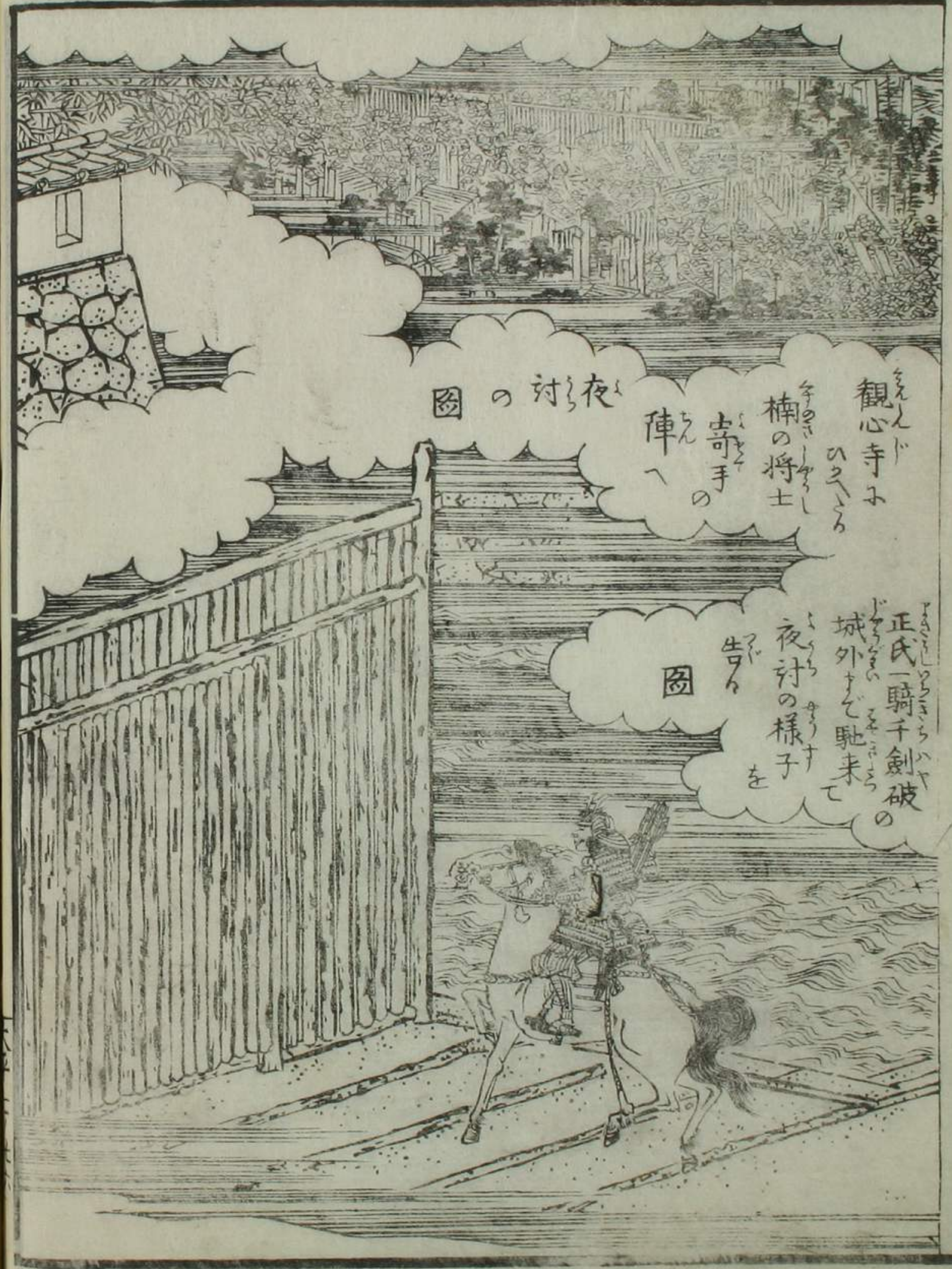
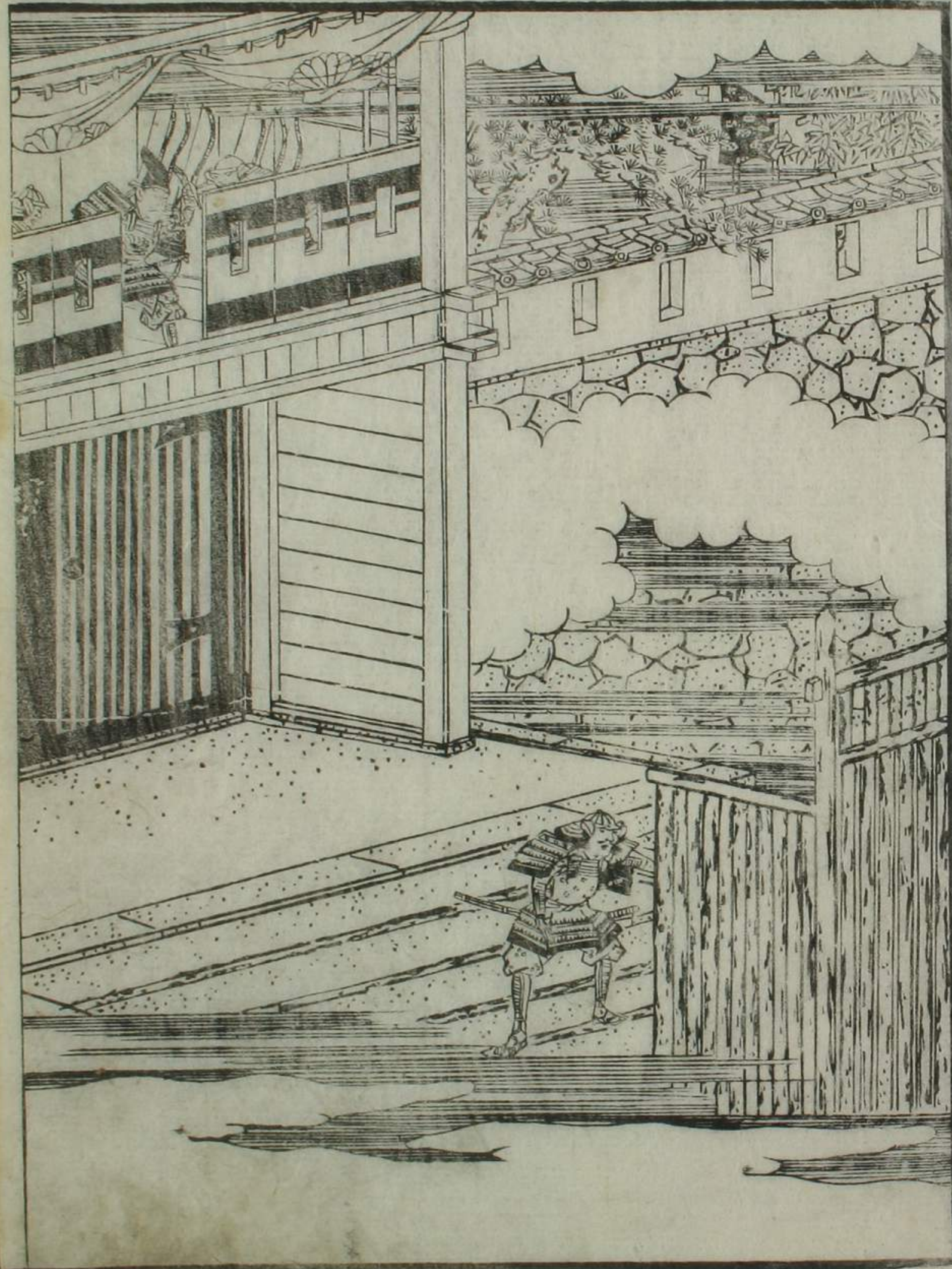
公經千劍破崩岩

正氏正遠夜襲敵備

千劍破の寄手責り度毎に敗軍し。渚卒の損亡多き。依て陣を  
を守りて日を送るが故。氣屈し勇氣疲れて皆退陣の心を生じ  
或ハ左右に事寄又ハ病に染りて。次第くは已くが分國へ勢を  
圓り引吸り。程に陣中以外の外に透て。残り宗徒の軍勢大に

氣を失へりし。聞へくれハ。六波羅より加勢として。宇都宮治部太輔  
公經。紀清兩黨の兵一千余騎を被下る。是は氣を得ず。渚  
大将又軍の評定在て。明日の合戦。宇都宮が新手の兵を以て先  
陣可為とぞ定る。次の日。宇都宮。紀清兩黨の輩ハ。赤氣屈荒  
手あれ。氣息も不。責近付城より投出す。大木大石を事共せず。  
味方の手負死人をとび越く。城の堀際まで押結。遂に屏際の麻  
垣逆木も。此時こそ引破れられ。城も少し。宇都宮より手を置  
氣色も。見へり。去とも。紀清兩黨の者とも。斑足王の身をも  
かざれ。天をも難翔。龍伯公の力を不得。山をも撃が。討死  
元より手負疵を蒙る者甚多。り。餘り。為方。無り。前  
を。兵。ハ。城。を。責。さ。後。陣。の。兵。ハ。手。く。小。鋤。鋤。を。持。て。山。を  
掘。倒。さん。と。ぞ。企。る。實。も。夜。晝。三。日。が。間。手。痛。く。堀。立。る。程。に。念。を





夜討の図

陣へ  
寄手の

観心寺の  
梅の将士  
ひきよる

図

告げ

正氏一騎千劍破の  
城外まで馳来て  
夜討の様子を



く大手の櫓一つ塀崩してぐり。惣軍是を見て我くも始り軍を止て。山塀べりりるのをもと後悔し。我くと塀くれども廻り一里に余り山ふ。大なる盤石巖石立つ。さる事なれば。左右く塀倒さるべしとハ見へざり。正成も此上ハ一夜討して敵の氣を取拉べしと被想る。處。觀心寺ふ扣へる。楠の良後會合して談じ。我く此所ハ安閑と見まか。宇都宮紀清兩黨の輩。本城へ疵を付られ。事主君の思名遺恨最深し。兎角ハ一夜討して敵を十里の外へ追拂り。又主君の目の前。屍を軍門に曝り。二ツハ實否を定むべし。後令味方。方々負りとも。城。強く。頼。不可有と。良後。一回て申くれ。正氏正遠も是を然とし。九月。今宵一夜討可懸ありと。其勢都合千三百余騎。先十人廿人を一組とし。計を云合て夜の暗。され。寄手の夜詰代。似て。陣。忍。又。間者。敵の大

將の本陣へ入て時刻を見合。後所。火をかくべしと申渡し。楠正氏ハ手勢を率して宇都宮陣の後。忍び。和田正遠ハ兵を三手。分て敵の本陣の左右。伏て相圍の時刻を待り。去程。間者ハ難く。大将の本陣へ忍び入。此彼。火をかくれば。和田正遠。二百余騎。岡を作て會釈も。大将の陣へ切入て。縦横無盡。破。陣。輩。本陣の火の手を見て。是を救えんと。騒ぐ。處に宵。忍び入る。楠。士。卒。十人二十人。此彼。馳散て。何某。楠。味。方。誰。官軍。返忠を。と。色。呼。程。寄手の惣軍。狼狽。廻。同。士。討。事。數。知。楠。正。氏。同。時。百。五。十。騎。を。引。率。宇。都。宮。陣。中。へ。真。一。文。字。馳。入。て。當。を。幸。ひ。切。立。其。鋒。尖。て。支。か。さ。し。の。紀。清。兩。黨。の。兵。も。蚊。の。子。を。散。す。如。く。に。逃。崩。れ。くれ。バ。正。氏。正。遠。志。貴。宇。佐。美。が。輩。此。勢。乗。て。驀。地。暗。し。諸。陣。く。を



麓崩ヤバ。休事不能して惣軍悉く敗走。逸陣を固る者ハ二階堂出羽入道道蘊長。寄四郎九衛門泰光。千兼介貞胤。高橋九郎九衛門通信。赤橋伊豆入道等の六陣也。城中ハ正成此侍を見とども。一人の兵をも出さず。櫓より見分してぞ居れり。斯ら處へ楠正氏唯二騎城戸の前へ馳来り。しるの由を呼ばれば。番兵既ニ城戸を開くとし。を正氏制して何様の時節。大将の下知もなき。何逆城戸を可開大なる強り。敵軍余り強く城を攻め。斯ハ其のひ也。此由大将へ申上り。其が見へぬと。味方の者共驚可申をれば。急ぎ立及びをり。と云捨てて引返す。正成此しを聞て正氏の智謀は。將者大切の戦場を退き。斯ら知し。一人来り事や。うべ。今見し味方の者共正氏の不見。驚き十分の戦ひを成得は。と被申す所へ。和田正遠が使也。とて細作の兵。一夜討の様子を告来り。れば。正成又これを聞て正

遠が智ハ正氏ハ勝り。惜哉。正遠も正氏也。思ふ國の戦を。早引取べしと被申す。案の如く正氏の見へざるに。驚き其手の諸勢早く山陰へ引退さる。正遠も正氏をみて。大将を見参の爲。城へ参。正のめり。不覺也。とて兵を圓め。手軽く觀心寺へ引取。嗚呼。正氏城まで参ら。残る六陣も中。足ハ溜り。止さ。の哉。と残念至極の事を。寄手の諸大将ハ二里三里遠逝して。次の日。白晝。勢をそろへて。元の陣へ及び。又日の間。恥て暮過。頃。密に立戻り。つりて見苦し。有様あり。

伊東赤松開中國

土居得能伏四國

去程。楠の城強う。追く加勢を差向。程。京都無勢也。聞へ。う。赤松二郎入道。圓心。苔繩の城。り。打て出。山。梨原の間。陣を居て。山陽山陰の兩道を差塞。六波羅の催促。因て。馳上。備前



備中備後安藝周防の勢を支ふる。五箇國の軍勢三石宿打集り  
伊東大和次郎惟郡を先陣として山里の赤松勢を追拂て通らんと  
しつゝる。小圓心が嫡子筑前守貞範兵を引て舟坂山に支へ伊東が宗  
徒の輩二十余人を生捕る。而小圓心これを殺さず情を懸て扶助しつゝ  
伊東大和次郎其仁恩を感じ忽ち志を変じて官軍に属し赤松に合  
体して三石山の城に楯籠り。能山に取上つて五箇國の勢を防ぎける程は  
備前の守護人加治源次左衛門大に怒り。手勢を率して押寄る。小一戦小  
利を失ひ。這くの体して兎息を指て退さる。因之播西の路弥塞つて  
中國の動乱不斜され。赤松圓心ハ山陽山陰より上京の勢ハ伊東惟郡  
堅く支へ止められ。今ハ心易しとて手勢を引具し。高田兵庫助が居城を責  
落し。足をも不休津國に上り。責上る。小路次とて官軍に志うつ。輩追く  
み馳加つて程なく七十余騎に成り。此勢を以て六波羅を責破ん

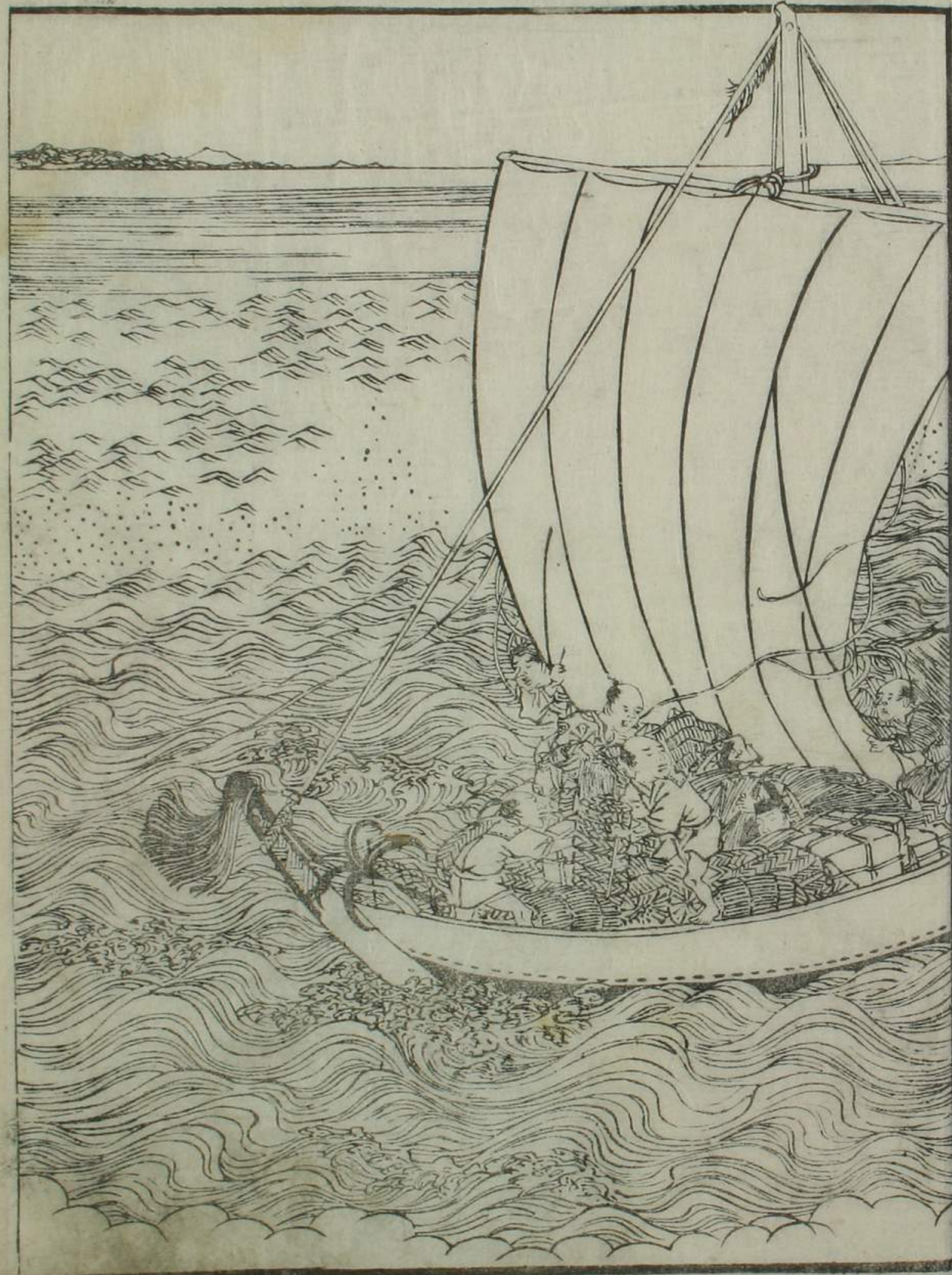
事ハ案内されども。若戦ひ利なき時ハ引退きて暫く人馬を休む。小  
兵庫の北に當て摩耶と云ふ山寺の有るに。先城郭を構へて敵を二十  
里の間縮まり。兩六波羅より一方の討手と憑る。宇都宮公經ハ十劍  
破の城へ差向つ。中國勢ハ伊東に支れて不上得。此上ハ四國勢を召上  
て赤松を可令征罰と被評定。多處に後二月四日忽ち伊豫國より早  
馬來つて。河野一族土居次郎政重得能弥三郎通信官軍に属し。て  
旗を舉。當國を切役へ土佐國へ打入。去月十二日長門探題上野介  
時直兵船三百余艘。急當國へ押渡り。星岡にて合戦有之。此處  
長門周防の勢一戦に打負て。討死の輩其數を不知。刺へ時直父子。其  
行方を知す。其後四國悉く土居得能に属す。間其勢既ハ六千余騎。宇  
多津今張の湊小船をそろへ。只今も攻上ると企て。間御用心可有と  
ぞ告り。畿内の軍未静。あざむる處。又四國西國追日て乱り。うら



國の危き事。且夕の間は在て人心皆薄氷を踏て深淵に臨が如し。抑今如斯天下の乱る事ハ偏り先帝の宸襟より事起り。若逆徒の輩。差違て先帝を奪取奉る事も可有。敢相構へて能く警固仕べし。隱岐判官が方へ下知を傳へれば。判官近國の地頭御家人を催して日番夜廻し懈るく宮門を閉て警固し奉る。因二月下旬ハ佐々木富士名判官義経が勤番して中門の警固ふひひるが。情世上を考ふる。子鎌倉の滅亡遠くざれば。哀れ此君を取奉て義兵を起さば。やと思ひ。くれども可申入便もなくて案じ煩ひくる處。或夜御前より官女を以て御盃を被下ぐる。判官賜之事能便也と思ひ。くれれば。潜り彼官女を以て申入るハ上様へ未知し。召れり。や楠正成金剛山に城を構へて。楯籠りて以て處。東國勢百万余騎して上京し。去二月初より責問ひ。いへども城副して寄手度く打負已は引色に成ては。又播磨國

小ハ赤松圓心宮の令旨を賜て義兵を揚。菩提摩耶の兩處に城を構へ京を縮め地を略して勢ひを震ひ。近く六波羅を攻んと相企ひ。又備前の住人伊東大和次郎三石と申所は城を構へ中國の道を差塞。六波羅上着の軍勢を相支へ。又四國の地は土居次郎得能弥三郎御方。参りて旗を立。長門探頭北條上野介時直を打破。四國を悉く切靡け。既大船をそろへて。此所へ御迎は参り。又京都を先へ責ひとも相聞へ。いへば御聖運を御用可有。時已は至り。ねとこそ覺て。義経が當番の間は刃心びやう。此所を御用有て。千波湊より御船に被召。出雲伯耆の間何の浦へも風は任せて。御船に寄られ。去ゆべき武士を御憑ひて。暫く御待ひ。義経御跡を追懸奉る。為に罷向ふ。休して。懸て御方。参り。しとを奏し。申す。官女此由を申入るれども。叡慮深く。彼が偽り。を申す。んと。思召る。る間。猶





先帝の  
跡を追  
奉る  
図

佐々木隠岐判官  
數百艘の船を



其志を能く伺ひ御覽せられん為とて。彼官女を義経にぞ給う。判官義経面目身に余りて覺る上弥忠烈の志願れられ去らば汝先兩國の間へ渡つて同心すべし一族を誥ひ御迎ひ不可參と被仰下る程。義経畏て則ち出雲國へ渡りて鹽治判官高貞を誥る所。小隱岐判官より使来て先帝官女を義経に賜ひ上。義経其地に至りて既し兩人隱謀の聞へり。有の儘に實否を申さるべしとゆゑてくれれば高貞偽て返答し其武家小對して九様の惡意を不存所詮義経隱謀の事。自是尋沙汰侍らんと申す。態と義経を我館へ押籠隱岐國へ収まらざり。

主上潜遁隱岐州

佛舍利御船救危難

此時隱岐國より且義経を御待有るれども餘り事滞りし。唯運に任せて遁れて見んと思召て。或夜の宵の終りし三位殿御局

御産の事近付ゆれば別處へ御移りし由りては其御連被召態と少將忠顯朝臣計を御供して潜し御所をさませり。此休し二人の怪し可申上駕輿丁とともさるるれは御輿を被止て吞も十善の御主自玉趾を草鞋の塵に汚し泥土の地を踏せり。恐多くも浅猿多れ頃ハ三月廿三日の事をなれば月待程の暗夜もこと不知となり出さる。今ハ遙か来りんと被思食されば未跡る山の瀧の響風は聞ゆ程あり。若追かけ進する事やと恐し思召されば一足も前へと御心計に進みゆるとも何習をせり。事もあらず行歩されば夢路をさる御心地して唯一所よのて休せり。忠顯朝臣に如何せんと思ひ煩ひて御手を引御腰を推進せり。今夜のうらみして湊邊まで心を遣ふとも互に心身ともに疲れて野徑の露は徘徊の夜深く深ふれば里遠うら鐘の声の山



端出る月子和して。聞へるを道知へとも。或家の許へ尋らる。忠頭朝臣  
門の戸を叩いて千波の湊へ何方へ行ぞと問われ。内より怪氣ある男  
一人出来て君の御有様を見進らる。心なき。田夫もれども。何とぞ。御痛  
敷や思ひ進らる。千波の湊は是より五十町計。いへども。道南北へ分れ  
て如何も御迷ひ可有存。いへ。御道へ。仕ゆんと申て。君を軽く  
と負進らる程。千波の湊へ。着ふ。爰。時。打鼓の音を聞。夜  
は未五更の初。案内仕る男。甲斐しく。湊の中を走り。廻て。伯耆州  
へ。漕返ら。商人船の有るを。鬼角。て。語。ひ。君を。屋形の内。乗進。その  
後。御暇申て。許。速。道へ。引返。し。ぬ。此。男。誠。唯。人。非。ざ。り。る。や。君。天。下  
御。一。統。の。御。時。左。忠。賞。可。有。と。國。中。を。被。尋。れ。共。我。を。其。者。と。い。は。し。と  
申。出。り。者。は。遂。に。無。り。り。夜。已。明。れ。船。人。纜。を。解。て。順。風。子。帆。を。揚。湊。の  
外。は。漕。出。す。船。主。君。の。御。有。様。を。見。て。唯。人。と。い。は。渡。ら。を。給。じ。と。思。ひ。ん。屋

形の前子畏て申らる。ハケ様の時。御船を仕て。い。こ。を。我。等。が。生。涯。の。面  
目。を。以。へ。何。國。の。浦。へ。寄。と。御。綻。子。隨。ひ。て。御。船。楫。を。仕。り。い。へ。し。と。申  
て。寧。々。他。事。を。さ。氣。色。也。と。忠。頭。朝。臣。隱。して。ハ。中。へ。惡。う。り。ぬ。へ  
と。被。存。ら。る。此。船。長。を。近。く。呼。寄。て。是。程。は。押。當。ら。れ。る。上。ハ。何  
を。り。隠。す。へ。さ。や。屋。形。の。中。に。御。座。り。る。を。日。本。の。御。主。忝。う。も。十。善。の  
君。と。入。ら。せ。給。へ。也。汝。等。も。定。り。と。聞。及。び。ぬ。ん。去。年。より。隱。岐。判。官。が  
館。に。被。押。籠。て。御。座。つ。る。を。某。盜。出。進。せ。る。也。出。雲。伯。耆。の。間。に。て  
去。り。ぬ。ん。泊。へ。急。ぎ。御。船。を。着。進。す。御。運。ぶ。御。閑。ら。ハ。必。ず。  
汝。を。所。領。の。主。と。成。べ。し。と。被。申。れ。バ。船。頭。世。は。嬉。氣。ある。様。を。取。揮  
面。揖。採。合。せ。て。片。帆。を。か。け。て。馳。ら。る。今。ハ。海。上。二。三。十。里。も。過。ぬ。ん  
と。思。ふ。所。は。同。じ。追。風。は。帆。を。か。け。る。船。十。艘。計。此。方。を。指。て。馳。ら。る。  
こ。し。築。紫。船。ら。商。人。船。と。見。ぬ。九。ら。り。て。隱。岐。判。官。清。高。君。を



追奉る船と見えへく。色くよどまやう立て漕近づく。船頭是を見く  
角てハ叶ひまじ。是は御隠れいへとして。君と忠顯朝臣とを船底に宿  
し進せ其上にあり物として乾らる魚を入らる俵を取積て水手握  
取其上に立双ひ丸く丸く櫓を押し。程なく追手の船一艘御  
座船に追つきて。屋形の中へ乗移り此彼捜し々れ共見出し奉る事不  
能扱ハ此船に名さうり。若怪しき人を乗らる船や通りつると尋  
ぐれば。船頭今夜子刺計に千波の湊を出ひひる船こそ京上臈  
うと覺しとて冠と申を召れらる人と折烏帽子着らる人と二人乗  
せ給ひひひつるが。其船今ハ五六里も先立ひひゆらんと申ぐれば。扱ハ疑も  
ちら其船也いざ追つくと云儘に十艘の船櫓を直し帆を揚て飛  
が如くは過去々。今ハ斯と心安覺へて跡の浪路を顧れば。又一里  
下つ追手の船百余艘此船を目にかけて操り操りて馳せける。

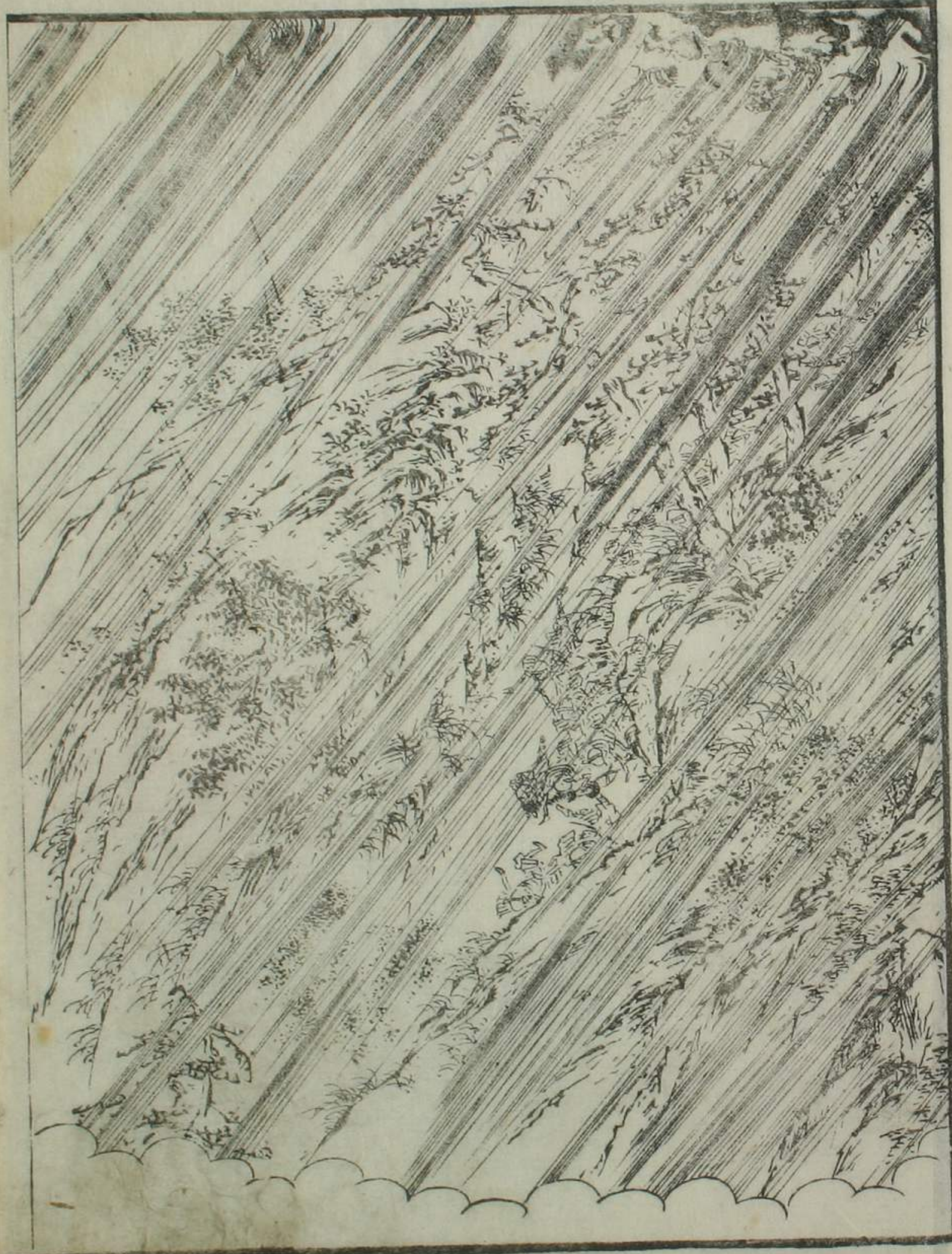
船頭大に慌て驚き帆の下に櫓を立て万里を一時に渡らんと声を帆  
に擧て働まぐれども。時節風さき沙差向て。船更に進ざれば。  
水手握取如何ハせんと立騒ぎ事已に急をりる。君船底より出  
御成て膚の御護り佛舍利一粒取出させ給ひて。御畳紙に乘りひ  
御祈念在て波の上より浮へるハ龍神納受やしうらん海上俄に風替  
て御座船を東へ吹送て。追手の船を西の沖へ吹戻す。扱を主上ハ席  
口の難を御遣れ有て。時の間は伯耆國名和湊に著りひね。忠顯朝臣  
一人先御船より下りひて。道行人に向ひ此邊に何なる者り弓矢取て  
人よ被知るやんと被問ぐれば其人暫立休ひて去る。此邊に名和  
又太郎長年と申者のひ。其身指て名に武士とハひり共家富  
一族廣ふして心定らる者としてひと語を々。忠顯朝臣能く事の子  
細を詳し聞て。聽て勅使として自彼が館に至て被仰るハ先帝



隱岐判官が館を御遁れ在て。今此湊へ遷幸しつゝ。長年が武勇兼  
て上聞は達せし間深御憑可有由被仰出畢ね憑られ進せ被申べ  
まや否哉速は勅答承つゞ奏達可成也とぞ被述べ折即名和  
長年一族を聚り酒宴半つゞりつゝ此由を承つゞ頭を傾け  
兎角の言も申得ざりつゝ所ふ舎弟小太郎左エ門長重進出  
申るハ古へより今ふ至り人の望み所ハ名と利の二ツを不出我等  
忝ぢくも十善の君は被遇奉て殺ひ尸を軍門は曝とも其名を後  
代に残さん事生前の思出死後の名譽可為也心を一筋は思ひ定  
めて速やりに御受可有之より外ふ別儀有はじく覺はと痺れれば  
長年を始當座の一族二十餘人皆此儀は同じ速に御受の勅答  
を奉て長年一族は向つゞ申るハ此上ハ急ぎ合戦の用意可  
成る。定めて追手も跡も懸りいらん。長重ハ早く御迎ひおきて

船上山へ遷幸なし可被申。旁ハ菟城の用意をなし疾船上へ御参り  
しと云捨て自鎧を一縮して直ふ其座を立れば長重をよめ一族  
五人腹巻取く投懸く。長年におくれじと皆御迎ひを馳りつゝ  
長年募義軍船上山 諸國官軍聚船上  
去程に長年長重ハ一族家人を引具し。湊を御迎ひお参りられ共  
俄の事して御輿をんども無りければ長重著る鎧の上は荒薦を卷  
て君を負進せ飛が如く船上の山坊へ入御なし奉る。長年又近邊の  
在家へ人を廻し思立事在て船上の嶺へ糧米を上らる。我倉の内  
みつると有。米穀を一荷持運ひせん者ハ鳥目五百つ可遣と觸  
られれば十方より人夫數千人出来て我劣らじと持送る程一日の  
間ハ糧米五千余石を運びつゝ其外金銀財寶を運び取残る所の  
余財ハ人民百姓も今ち共へ其後已が館ふ火を懸て百五十騎の





船上山合戦風雨迅  
雷の中こそ名和  
長年寄手佐々木  
清高  
兵を  
谷へ  
落  
す  
図



兵を卒し。船上に馳登りて皇居を守護せし奉る。長年が一族同苗七  
郎といへ者智勇とくまじき者也。白布五百端、つりつるを旗と  
し、松の葉を焼く煙に薰べ、近國諸武士の家々の文を書き、此の  
木本彼の峯に立置る。此旗悉く峯の嵐に吹翻て、大勢山中  
に馳集ると覺て、夥しくぞ見へり。去程、同月廿九日、佐々木  
隠岐判官清高、同彈正九衛門尉同佐渡前司、其外塩谷富士名金  
持朝山、福依等、雲伯、周石、四州の輩を催促して、其勢三千余騎を  
率し、船上の南北よりぞ押寄る。此船上と申山、北の方、大山に續  
きて峙ち、三方又峻じて地僻也。俄に拵る城を、未一箇所の  
堀も不堀、一重の屏も不塗して、唯所く、大木少く、切倒して、逆  
木に引房舎の臺を破つて、かひ揃はざる計也。寄手ハ斯り事も  
不見分して、阪半まで責上り。遙に峯を向上れば、松拍生茂て、

最物凄き木陰く、家々の旗四百流れ、雲に翻り、日暎じて見へ  
る。バ、初ハ早近國の者ども、大勢馳集り、と覺り、中く我等  
が勢計りを、ハ、逆も責破る事成が、とて心おろして、進不得、後日  
暮し、斯てハ、果トと思ひ切、大手搦手一同に、南北の道より責上る。  
城中ハ、敵の勢の分際を見れば、いと木間く、縫れ伏て、散く、遠  
矢を射立る。搦手へ向ふ寄手の大將、佐々木彈正九衛門尉、何方を  
射とも知らぬ、流矢に右の眼より、頭腦を付けて射られ、バ、脈も止す  
真倒し馬より、落ちて死する。其手の兵五百余騎、大將を討て、  
色を失ひ、一戦も不及引退まらねば、佐渡前司ハ是を見て、大に恐れ  
兼て、鎌倉の滅亡、遠く思ひ、バ、八百余騎を引具し、旗  
を卷甲を脱で、城中へ降参す。大手に向ふ、隠岐判官清高ハ、搦  
手の動靜を夢も知ず、早天より、押寄一木戸口、支へて、悪手を



入替く責立れば。城中にも射手をすつて射る程。互に牛角の  
鬮して何果べしとも見へざる所。日已に西に傾く頃。一天俄に  
曇り。時をぬ雷鳴をきかして。山谷を轟けし風吹落る事。笠前の  
如く。雨の下車車軸に似たり。城の兵は峯より吹下す。雨風を背に  
受り事なれば。少くもるや。麓より責上り寄手の兵は。雨風を  
面より受り事なれば。眼暗く働か得ず。皆此彼の木陰に立寄  
て暫く雨を凌ぐ。隊伍を乱して立騒ぐ。長年是を見たりも  
射手を左右に進め散く射す。楯の端のゆぐ所を得たり  
や賢しと云儘。長年を始。舎弟小太郎九門尉長重。同小太郎長生。  
其外の一類。徒卒皆抜つて峯を下り。鋒をさへ切崩せ。大手の  
寄手五百余人。皆谷底へ轟落され。岩に挫かれて頭をさき。巴が持  
たる太刀は喉を貫やうれて死する者。數を不知。隱岐判官清高。必

小高き嶺に磔兵を下知して有る。後陣は備ふる塩谷朝山富士名  
金持が輩。元より官軍の心を通じれば。俄に雨を造りて清高。後  
小扣へし。小沢右兵衛が陣へ矢を發つ。小沢が陣中大に周章。色を  
立て見へたり。清高もハ彼者共に出りやう。そこで此所を蒐  
破つて一先本國へ引取べしとて。城へハ必しも顧み。朝山塩谷が焔を  
立てる勢の中へ會釈もなく。割て入真一文字。小懸崩しつと行やけ  
て味方をこねば。三十七騎も成より。清高木の船も取棄て本國  
へ引及て。國人のつし心変正して。佐渡前司が猶子佐渡六郎  
が下知。小随の津々浦々を固めて支たり。清高大に怒り陸上にて  
六百余騎を渡り合。散く打破て主從僅に十八人。小舟に取のり  
風を任せ若狭へ。越前敷賀へ落行。這くの休く皇都へ  
登り。六波羅没落の時。江州番場の辻堂に腹



三切てぞ失りる。世澆未成やと。天理未育るや。余も  
情を君を惱し奉る。佐々木清高は。武勇の聞へ有る。三  
日。向ふ亡び失て。首を軍門の幢に懸り。死せる。不  
思議な。先帝  
既。隱岐國より。伯耆國。船上。山。よて。還幸成て。名和。又。太郎。長年。是  
子。應下。奉り。佐々木。隱岐。判官。清高。同。彈正。左衛門。尉。戦。打負て。其  
行方。を。知すと。聞へし。國。より。君。志。行。輩。頗。馳。参。事。晝。夜  
曳。も。不。切。先。一。番。出。雲。守。護。塩。谷。判。官。高。貞。富。士。名。官。義。經。朝  
山。次。郎。國。氏。金。持。福。依。一。黨。二。千。三。百。余。騎。佐。々。木。清。高。の。裏。切。り。  
夫。より。直。ち。参。上。す。其。次。當。國。大。山。の。衆。徒。七。百。余。騎。を。馳。付。り。  
ハ。是。を。始。と。て。因。幡。伯。耆。出。雲。の。三。箇。國。の。間。都。て。弓。矢。を。携。り。  
程。の。武。士。の。参。り。ぬ。者。ハ。多。り。是。而。已。る。ず。備。前。國。ハ。大。富。太。郎  
幸。範。和。田。備。後。次。郎。範。長。知。間。二。郎。親。經。射。越。五。郎。左。門。尉。範。貞。和

氣。弥。次。郎。季。経。児。島。備。後。三。郎。高。德。美。濃。権。介。石。生。彦。三。郎。其  
外。今。木。藤。井。中。吉。の。一。族。備。中。國。より。新。見。成。合。那。須。三。村。小。伎  
河。村。庄。真。壁。備。後。國。より。江。田。廣。沢。宮。三。吉。美。作。國。より。菅。家  
の。一。類。江。見。芳。賀。淡。谷。南。三。郷。の。輩。石。見。國。より。澤。三。角。の。一。族  
安。藝。國。より。魁。谷。小。早。川。の。一。黨。或。ハ。四。國。九。州。の。者。も。聞。傳  
く。我。前。と。馳。参。る。間。船。上。山。に。居。餘。す。四。方。の。麓。二。三。里。ハ  
木。下。竹。陰。も。軍。勢。を。さ。る。所。も。多。り。猶。此。上。伊。東。赤  
松。土。居。得。能。の。輩。を。牒。じ。合。さ。ん。此。兵。を。以。て。京。六。波。羅。を。責。破  
て。不。日。還。幸。成。給。え。ん。事。何。の。疑。ふ。所。ら。ぶ。と。勇。れ。の  
こそ。あ。り。なり









高時

兩

義助

兩

直義

兩

則祐

兩